

図書館だより

1998. 7

就任の挨拶

丸山 隆司

さる2月7日の全学教員（文学部・人間生活学部・短大教授会のメンバー）による選挙で、図書館長に選ばれてしまった。私自身にとっては、まさに青天の霹靂、驚天動地であった。遡れば、4年前、埼玉大学へ国内研修に出ていたとき、研修が終わろうとしていた、やはり2月に、時の国文学科主任・藪禎子先生から、来年度から国文学科の主任に選ばれましたのでよろしく、という電話をいただいたときも同じく青天の霹靂、驚天動地であった。それ以降、国文学科の主任を2期4年間、務めてきた。2期4年間、主任を務めて、これでもはや役職は十分



『大日本史』 昭和4年刊（国文学科・伊藤敬先生所蔵）

目次

就任の挨拶	丸山 隆司	1
フェアネスってなあに？		
— インターネット編 —		5

働いてみた図書館	11
新着CD-ROM案内	11
おしらせ・夏休みの図書館	12

だと思っていたところに、あらたな大役に選ばれてしまった(シマッタ!)。主任とは調整係であった。つまり、役職とは調整役である、というのが私の認識である。この調整のために、時間を割かれることはつらい。正直に告白すれば、もっと時間がほしい、楽をしたい!というのが、本音である。図書館長という役職について、伊藤敬先生・小笠原克先生が任に付かっていたのを身近に見てはいたのだが、その仕事がいかなるものなのかということについてはほとんど未知であった。側目で見ているかぎり、それほど忙しそうには見えなかった。つまり、学科主任よりは閑職のように見えた。したがって、私の選択は選挙の結果を受けることになった。これが、館長を引き受けるまでの判断であった。だが、この判断は1ヶ月も立たない間に甘かったことを思い知らされる。

この館長という未知の役職を理解すべく図書館の職員のみなさんから、さまざまなオリエンテーションを受けてゆくうちに、この役は閑職ではない、という認識へと変わった。たとえば、図書館は奉仕・整理・総務という三つの部門に分かれている。さらに、16条と花川の2つに分かれている。各部門では、毎日業務日誌がつけられている。その業務日誌に、いちおう、目を通して館長の判をつく、という仕事がある。もちろん、いわゆる***判でもいいわけだ。しかし、そうであっても図書館事務室へゆき、日誌をめくらなければならない。もちろん、そこへいけば、館長の判の必要な他の書類も待っている。館員の休暇についても館長の判がいるのだし、外部からの書類にも、いちおう、目を

通したという意味での押印がある。さらに、図書館では、週に1度、選書委員によって購入する図書の選定が行われている。その選書についても、目を通す必要がある。つまり、図書館の業務全般について、館長は判をつかなければならない。伊藤先生・小笠原先生の偉大さが実感される。もちろん、前館長・関憲治先生も例外ではない。今まで図書館のカウンターで本を借りることが、図書館との接点であったのだが、それを支えているシステムの内側へ入ってみると、一冊の本を借りることにしても図書館の各部門にかかわっていることが理解できた。利用する側としては、それでもさまざまな不満がある。このずれをいかに調整してゆくのか、館長というのはそういう役なのだと、まともや、実感させられている。

ところで、なぜ、私が館長に選ばれたのか? そんな理由をあれこれと詮索してみたところで、所詮、因縁話にしかならないだろうし、因縁話というのは結果からの合理化でしかないのだから、聞かされる他人にはホラふきとしか受け取られないのが必定であると承知しつつ、図書館との因縁を話してみよう。

じつは、先に触れた国内研修中に、契沖という真言宗の僧が、元禄時代に書いた『万葉代匠記』という注釈書について調査・研究していた。契沖が『万葉代匠記』を書くことになったのは、かの水戸光圀の依頼がきっかけである。この『万葉代匠記』には、初稿本と精撰本という2種類の原稿がある。はじめ光圀の依頼を受けた契沖は初稿本を献上するのだが、光圀にはこれが気に入らなかった。それでやり直しを依頼さ

れて精撰本を契沖は書く。そのやり直しの時に、光圀は契沖にかなりの書物を貸与している。簡単にいえば、光圀は初稿本に実証性が足りないと考えたようだ。そこで、水戸にあった本を貸与して、やり直しを依頼した。そんな書物がなぜ水戸にあったのか。問題はそこなのだ。光圀は、『大日本史』という歴史書を編纂しようと企て、彰考館という編纂所を設立し、学者や書写係を雇っていた。これまで日本で編纂された国史（『日本書紀』以下の正史・六国史）は編年体であったのだが、この『大日本史』が歴史書として目指したのは、紀伝体という様式であった。もちろん、かの司馬遷の『史記』に倣ったことである。つまり、『大日本史』を「日本の史記」としようと企てたのだ。徳川御三家のうちでも禄高の最も少ない水戸藩の第二代藩主の光圀が、なぜ、そんなことを企てたのか、さまざまな議論はあるのだが、それはともかく、係わりのあるエピソードとしていえば、つぎのようなことがあげられる。すでに、光圀がそのような史書の編纂を企てる前に、幕府は、大学頭であった林羅山に史書の編纂を命じていた。『本朝編年録』（神武天皇から宇多天皇まで）である。この史書は慶安三年（1650年）に完成するのだが、幕府は、その続編の編纂も命じていた。ところが、世に振袖火事といわれる明暦の大火（明暦三年=1658年）によって、羅山が苦勞して蒐集していた資料が焼かれてしまった。羅山はこれに落胆し、大火の数日後に死んでしまう。羅山の後を受け継いだのは、その息子・鷲鳳である。鷲鳳は、その編纂所を「弘文館」と拝命して続編の編纂に取り組む。

その編纂期間のあいだ、鷲鳳は「国史館日録」という日記を付けている。この日記のなかに、国史館・弘文館には、つぎのような服務規程（「法制」）があったことを書いている。

- 一に曰く、出席者は、辰の後刻に至り、申の刻に退去すべし。
- 一に曰く、毎月、五日は、休息すべし。
- 一に曰く、官本は勿論、他所より呈する旧記、損なふべからず、私に写すべからず。
- 一に曰く、満座、意事協はざることあると雖も、この席において口論すべからず。
- 一に曰く、諸事につきて、弘文院の指揮を守るべし。

寛文四年十一月朔日 奉行（原漢文）

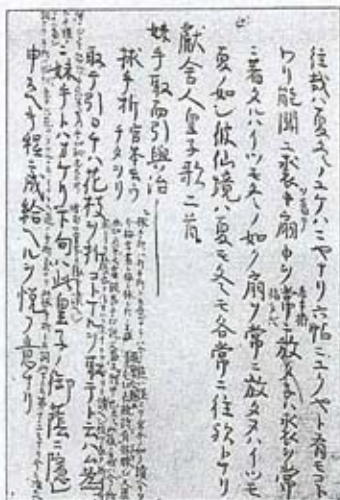
「弘文院」とは、鷲鳳が將軍から賜った号である。ところが、この服務規程を、おそらく見習って、かの彰考館でも、やはり、「史館警」という服務規程が設けられていた。

- 一 館に入るものは辰の半ばに入り、未の刻に退くべし。
- 一 書籍類は謹んで汚したり破損したり紛失するべからず。
- 一 大声で談話・争論することは最も慎むべし。
- 一 文を論じ、事を考える事は各々力を尽くすべし。もし、多の者が反論するこ

とがあれば、虚心にこれを論じあい、決しておのれひとりの見解にとらわれてはならない。

- 一 席においては、怠慢・放恣であってはならない。

(原漢文)



『万葉代匠記』精撰本(契沖自筆)『久松潜一著作集12 契沖伝』より

この服務規程を見ると、いまの図書館の利用上の注意にもつながるような規定が見られるのも興味深い。歴史書を複数の人間がプロジェクトを組んで編纂するうえで必要な組織的な利用規定といえよう。現在の立花隆や猪瀬直樹などのノンフィクション作家のプロジェクトと共通するところがある。鶯鳳が編纂することになる『本朝通鑑』は、従来の様式と同じく編年体であったが、かの六国史は宇多天皇の前までで記述が終わっている。それ以降は国史(正史)はない。とすれば、『本朝編年録』の続編を編纂するためには、それ以降の記録を蒐集しなければならない。公家の日記や物語などを参照しな

がら、そこにある記述を編年に編纂し直すという作業である。それには、とにかく、史料がなければならない。必然的に、この弘文館は史料の蒐集と蓄積を行い、図書館と化してゆくことになる。鶯鳳は「国史館日録」に、その蒐集の苦勞を記している。たとえば、鶯鳳が、幕府を通じて、京都の公家が所蔵している記録類を見せてほしいと申し出のだが、その申し出に応じて公家から出された史料は、結局、鶯鳳の期待はずれのものばかりであった。つまり、京都の公家たちは協力的ではなかった。その一方で、鶯鳳のところに貸本屋が出入りしていて、さる公家の家から出た本であるのだがこれはどうでしょうなどといったセールスがあった。鶯鳳は、時にはそれを借りて書写させたり、時には買ったりしている。もちろん、このようにして蒐集したものは、大事に保管され、年に一度は曝書を行っている。つまり、本の虫干しである。今日はこの系統の本、明日は別の系統というふうにてである。ここから伺われるのは、蓄積された書物・記録類が分類されていた、ということである。とすれば、この弘文館は歴史書の編集所としての機能と同時に、ライブラリーでもあったことになる。翻っていえば、彰考館とて事情は同じである。光圀は、『大日本史』を南北朝統一までまとめようと考えていた。とすれば、六国史の最後『三代実録』以降の史料は正史にはないのだから、さまざまな記録を探し出さなければならない。そのために光圀は館員のひとり、佐々介三郎という人物に水戸光圀の紹介状を持たせて諸国に派遣する。これがのちに水戸

(9ページに続く)

フェアネスってなあに？

— インターネット編 —

Fairness:

Fuji Academic Information Resources
&
Network Services System

<http://www.fujijoshi.ac.jp>

図書館システム「フェアネス」が誕生してから5年目となりました。この間にカード目録はコンピュータによるデータベースとなりました。また平成8年4月には、閲覧室にあったカードケースに代わってOPAC端末が置かれました。そしてカウンターでは皆さんが貸出のためにカードを書いたりする必要もほとんどなくなりました。このようにフェアネスは少しずつ成長していますが、このたびインターネット上でアクセスが出来るようになりました。フェアネス・ホームページは、図書館サービスの新しい窓口です。今回インターネット上で提供できるようになったサービスは大きく分けて

- ・図書館からのお知らせや案内情報
- ・インターネットOPACサービス

の二つにまとめられます。

そこでこの新しいサービスについて前回の図書館だより48号に続いて「フェアネスってなあに？—インターネット編—」としてご紹介したいと思います。

- A. フェアネスFAIRNESSへようこそ
 - B. 所蔵資料の検索と利用者情報
 - C. 他機関のホームページ

まず、お知らせ・案内のページには簡単な図書館の紹介、交通アクセス、利用案内などがハイパーテキスト形式で掲載されています。

インターネットOPACサービスは、皆さんがふだん図書館で使っているOPAC端末で行っている検索サービスとほぼ同じです。インターネットの特徴を活かしたサービスとしては、他の機関や大学のホームページやOPAC検索サービスを利用することが出来ることです。

このようにフェアネスの新しいサービスは自宅や研究室からの蔵書検索を可能にしたものですが、貸出や予約が行える訳ではありません。また、図書館内には残念ながらインターネットを利用できる端末がありません。こうした環境の整備もこれから順次行っていこうと思っています。



A. フェアネス FAIRNESS へようこそ

はじめに、フェアネスのトップページについて簡単にご紹介いたします。

日本語版 (Japanese version)

- 藤女子大学図書館の紹介 藤学園や図書館の歴史と、16条・花川各々のキャンパスへの交通手段を見ることができます。
- 図書館からのお知らせ 2ヶ月分のカレンダーを見ることで、開館日・閉館日の予定がわかります。システム休止日はこのコーナーでお知らせしています。
- 図書館利用案内 ここでは、利用の手引き 開館時間・休館日 貸出冊数と期間のインデックスを設け、図書館の利用方法・手続や貸出冊数・期間を確かめることが出来るようになっています。
- インターネットOPACサービス インターネットOPACサービスのトップページへ進みます。ここから、蔵書の検索をしたり利用者情報を見たりすることが出来ます。まずは、はじめに を選択して下さいね。
- 藤女子大学蔵書検索サービス OPACサービスの目玉です。資料の検索をしたい時は、直接こちらを利用すると早道です。
- 他機関のホームページへ 新しいサービスで国内外の機関へ接続することが出来ます。詳しくは 8ページ を見て下さい。

* 英語版 (English version) もあります。構成や内容は、日本語版とほぼ同様ですので、どうぞ try してみてください。

ご意見・ご質問は・・・

この図書館ホームページに関してのご意見・ご質問は図書館員に直接お寄せ下さるか日本語版・英語版のトップページの下の方にある E-mail をご利用下さい。

E-mailアドレス: lib.admin@fujijoshi.ac.jp

図書館総務係 (システム担当)

B. WWW版OPACの蔵書検索と利用者情報

インターネットOPACサービスには「はじめに」「資料を探す」「利用者情報」「他機関のホームページ」があります。ここでは、蔵書の検索と利用者情報の検索について紹介します。

「資料を探す」を選択すると蔵書検索画面になります。このページはトップページ「フェアネスへようこそ」にある「藤女子大学蔵書検索サービス」からもアクセス出来ます。

検索対象の範囲は

- ・データベース 書誌データベースのみ
- ・和洋区分 和洋、和書、洋書
- ・資料区分 全て、図書、雑誌
- ・一覧表示 50件、100件、200件から選択して指定できます。

検索値の入力項目は

- ・タイトル 読みによるand/or検索
書名表記形の前方向一致検索
(ひらがな、カタカナ、全角、半角は区別しない)
 - ・著者名 姓名の読みのand/or検索
表記形によるand/or検索
 - ・出版者 出版者の前方向一致検索
 - ・件名 学情登録の済んだ書誌の件名標目による検索
 - ・分類 NDCの分類から選択
 - ・キーワード 現在は使用できません
- のうち1つ又は複数の項目に検索値を入力します。

「利用者情報」のページで利用状況の確認が行えます。これは、閲覧室にあるOPAC端末の「利用者問い合わせ」画面と同じものです。

自分が借りている資料や予約している資料の一覧、返却期限や予約資料の受取り期限等を知りたい時に利用できます。

利用者IDとパスワードを入力して下さい。

検索値入力（検索条件を指定して下さい） 操作方法	
<ul style="list-style-type: none"> ・データベース ● 書誌DB 参照DB (参照DBは現在使用しておりません) ・和洋区分・・・ ● 全て 和書のみ 洋書のみ ・資料区分・・・ ● 全て 図書のみ 雑誌のみ ・一覧表示件数 ● 50件まで 100件まで 200件まで 	
<input type="button" value="検索処理実行"/>	<input type="button" value="入力データクリア"/>
<ul style="list-style-type: none"> ・タイトル ・著者名 ・出版者 ・出版年 ・件名 ・キーワード ・分類 	<input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>
Internet OPACに戻る メインメニューに戻る	

<蔵書検索画面>

利用者ID、パスワードを入力して下さい	
利用者ID:	<input type="text"/>
パスワード:	<input type="text"/>
<input type="button" value="処理実行"/>	
<input type="button" value="入力データクリア"/>	
Internet OPACに戻る メインメニューに戻る	

<利用者情報検索画面>

C. 他機関のホームページ

ここでは、本学にはない資料等について新しい情報をキャッチすることが出来ます。

大学図書館のWWWサーバへ

- ・ [日本国内の大学図書館関係WWWサーバ（東京工業大学附属図書館）](#)

東京工業大学附属図書館で作っている国内で最も良く利用されている大学図書館へのWWWサイトです。

大学共同利用機関へ

- ・ [学術情報センター](#)

国内外の接続機関が分担して作成した総合目録や様々な研究用データベースを提供しています。

- ・ [国文学研究資料館](#)

マイクロ資料目録、所蔵和古書目録、国文学論文目録のデータベースを作成し、オンライン検索サービスを行っています。

- ・ [国際日本文化研究センター](#)

日本研究に関する様々な情報を広報や研究用データベースとして提供しています。

国内外の図書館へ（各国の主な納本図書館を紹介しています。）

- ・ [国立国会図書館（NDL）](#)

最近一年間に納本され整理された和図書の検索が出来ます。

- ・ [Library of Congress（米国議会図書館）](#)

世界の標準ともいべき図書館です。ホームページの [LIBRARY SERVICES](#) から書誌検索が行えます。

- ・ [British Library（英国図書館）](#)

英国の中心となる納本図書館で、ホームページから



OPAC97に

アクセスすると書誌検索が行えます。

出版情報へ

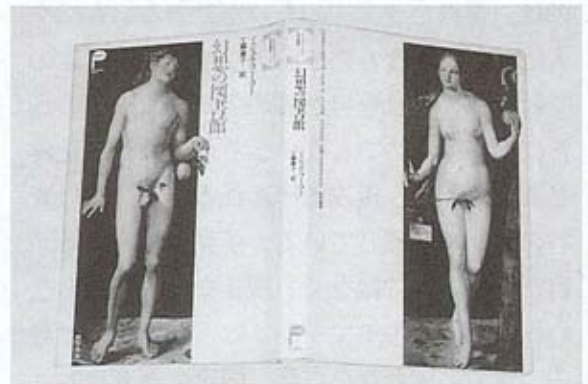
- ・ [TRC図書館流通センター](#)

国内で出版・流通している書籍について新刊案内や在庫情報などを見ることが出来るデータベースです。

(4ページより)

光圀の諸国漫遊の説話のもととなる(ちなみに、この佐々介三郎はかのスケサンであり、かのカクサンは、やはり彰考館の館員であった安積寛だといわれる)。史実の伝えるところによれば、黄門様はお国元の水戸と江戸との往来、伊豆の温泉に行ったぐらいの範囲しか旅行したことがないようだ。もっとも、光圀は若い頃は江戸市中を、当時はやっていたカブキモノの派手な姿で出歩き、吉原にも通っていたというが。それはさておき、このふたつの史館、鷺鳳の弘文館と光圀の彰考館の間には人と本の交流があったことも、さきの「国史館日録」には記されている。つまり、歴史書の編纂しかもその記述の様式を異にする歴史書の編纂が、お互いにその内情を知りながら進められていた、ということになるだろう。そして、そのために、双方とも資料の蒐集に務め、その結果、それぞれにライブラリーを産み出すことになったのである。もちろん、それまでにも、書物の蒐集が行われてこなかったとうわけではないが、ある目的のためのそれが集中的に行われ、また、そのために系統立てた書物の整理が同時に進行していたというのは、この時が初めてではないだろうか。おそらく、これ以降、大名たちの間で書物の蒐集が流行ったのも、これが先駆のように思われる。たとえば、現在でも有名な加賀百万石前田家の文庫・尊経閣なども、その一例であるように思われる。また、大名ならずとも、好書家があらわれるのもこれ以降のようだ(岡村敬二『江戸の蔵書家たち』)。契沖の『万葉代匠記』のことを調査してゆくうちに、現在、**文庫と呼

ばれているものの起源にまでいってしまったことになる。そして、そうした書物の蒐集を抜きに、万葉集の注釈の方法も成り立たなかった。ちなみに、契沖の『万葉代匠記』は、現在でも、その評価は高く、近代の注釈の方法である文献実証主義をはじめて実行したものとされる。



『幻想の図書館』ミシェル・フーコー著

ところで、この時期の書物の蒐集にとって忘れてはならないこと、それは出版文化の隆盛期である。さきに見たように鷺鳳のところに本屋が出入りしていたが、十七世紀半ばから版本による出版が飛躍的に増加し、本屋という商売が生まれる。マーシャル・マクルーハンのいう「印刷革命」(『グーテンベルクの銀河系—活字人間の形成』)の世紀である。契沖の『万葉代匠記』にしろ、『大日本史』にしろ、それらが依拠する実証主義とは、書物や記録、つまり、書かれたものを証拠にする。とすれば、

記号の印刷された黒と白の紙面から、閉ざされたまま埃をかぶっている一巻の書物から、それが開かれて忘れられていた言葉が飛び立つ瞬間に、ひとつの妄想のようなものが生ま

れることがあるものだ。それは、静まり返った図書館のなかで、念入りに翼を広げている。そして、列柱をなす書物、整然と居並ぶ表題、かずかずの書棚は、図書館をくまなくふさいでいながら、他方では、不可能の世界へとぼっかり口を開けている。空想的なものが宿るのは、書物とランプのあいだである。もはや人は、幻想的なものを心のなかにもち運ぶのではない。それを自然界の突飛な出来事のうちに期待するのでもない。それは、知の正確さのなかから、汲みあげられるのだ。富は資料のなかで待機している。夢見るためには、目をつぶるのではなく、読まなければならない。ほんもののイメージは、知識なのである。すでに言われた言葉、厳密な調査検討、細かな情報やモニュメントの微細なかけらを

山のようにあつめたもの、複製の複製、そうしたものこそ、近代の経験においては、不可能の成果の威力を発揮する。

(ミシェル・フーコー『幻想の図書館』)

ということなのだ。しかし、この「近代」も、あらたなメディアに移行しようとしている。書物は、いずれ「埃をかぶっ」たまま、再生紙になるのを待つことになるかもしれない。図書館には、天井にクモの巣のようにコードがはりめぐらされ、中央には一機のスパコンが聳えることになるかもしれない。バベルの塔のようにあるいは巨大な卒塔婆のように。

契沖という真言宗の僧の仕事を批評・論評してきた、まさに因果がめぐってきた、と観念すべきなのだろうか。

資料案内

* 印の資料は図書館にあります(全て本館の所蔵です)。

- | | | |
|------------------------------------|----------|---------------------|
| * 『万葉代匠記』 「契沖全集」 | 岩波書店 | <918.5/Ke21i>他 |
| * 『日本書紀』 | | |
| 『新編日本古典文学全集』 | 小学館 | <918/Sh69s>他 |
| * 『史記』 「新釈漢文大系」 | 明治書院 | <928/Sh69>他 |
| * 『本朝通鑑』 | 国書刊行会 | <081/Ko53/H> |
| * 『国史館日録』 | 続群書類従完成会 | <210.08/Sh89/Ko:1>他 |
| * 『日本三代実録』 「国史大系」 | 大八州出版 | <210.08/Ko53/4>他 |
| * 『ケ-テンハルクの銀河系』 マーシャル・マクル-ハン | みすず書房 | <361/Ma21> |
| 『大日本史』 徳川光圀撰 義公生誕三百年記念會編 | | 大日本雄辯會 |
| 『江戸の蔵書家たち』 岡村敬二 | | 講談社 |
| 『幻想の図書館』 ミシェル・フーコー 「ミシェル・フーコー文学論集」 | | 哲学書房 |

働いてみた図書館

非常勤職員 西岡祐子

本というのは表現されている内容・中身が重要で、私たちはそれを本に求めるわけですが、膨大な量の本を取り扱う側からそれを媒体（モノ）としてみると、本とは重く、時に埃に塗れ、また紙は刃物のように鋭いなかなかの厄介ものでもあるとも言えそうです。少々そそっかしい私の手には生傷が絶えません。まさに血と汗と埃の仕事でもあります。本の伝える中身を、利用者のもとに届ける橋わたしとなれるよう、励みたいと思います。



西岡さんは、昨年5月から本館で働いています。月～金曜日は1階の図書館事務室での受入・整理作業、土曜日は閲覧室での奉仕業務という活躍ぶりを見せています。

新着CD-ROM案内

<本館>

- 『METLICS』：東京都立中央図書館所蔵目録。
- 『風俗画報』：雑誌『風俗画報』（明治22年～大正5年）の全号を取録。
- 『文章倶楽部』：雑誌『文章倶楽部』（大正5年～昭和4年）の全号を取録。
- 『新編国歌大観』：『新編国歌大観』全10巻の歌集本文（約45万首）と解題。

<花川館>

- 『NACSIS学術雑誌総合目録和文編・欧文編1996』：
全国の学術研究機関で所蔵する約21万種類の学術雑誌の目録。
- 『科学技術文献速報ライフサイエンス編』：
JICST（科学技術振興事業団）が世界50数ヶ国から収集した文献を日本語抄録付きで紹介。年6回更新。
- 『JICST資料所蔵目録』：JICSTが所蔵する国内外の雑誌等の目録。
- 『NHKきょうの料理大百科』：材料やエネルギーなどから料理を検索。食材図鑑付き。
- 『季刊書誌ナビ』：国内発行の図書などのデータ約110万件を取録。年4回更新。

A V 資料についてのお知らせ

図書館内限定利用だったA V資料が、当日の閉館時までの期限内で学内でも使用できるようになりました。1人1回10本(枚)まで利用できます。

また、花川館所蔵のレーザーディスクが、本館でも利用できるようになりました。OPACで検索できますので、学内貸借用紙でお申し込みください。詳しくはカウンターまでお問い合わせください。



夏休みの図書館



- 期間 7月31日(金)ー9月14日(月)
- 開館時間 月一金 9:30ー16:30
土 9:30ー12:30
- 休館日 8月11日(火)ー8月15日(土)
9月 1日(火)ー9月 5日(土)・12日(土)
- 長期貸出 7月24日(金)より開始します。
9月21日(月)が返却日です。
9月 8日(火)からは通常貸出(2週間)となります。
- 貸出冊数 通常通り(10冊)です。

詳しくは掲示板・配布資料をご覧ください。

藤女子大学 図書館だより
藤女子短期大学

第53号 1998.7

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館
TEL 011-736-5405 FAX 011-709-4770